

京都大学図書館機構の発足に寄せて

事務改革・社会連携・渉外(東京)担当理事兼副学長 **本間 政雄**

2001年1月、旧文部省と旧科学技術庁が統合し、文部科学省が発足した。旧文部省で大臣官房総務審議官として教育改革、政策調整を担当していた私は、両省庁の統合を機に、京都大学事務局長として転出することになった。国立大学の事務局長として仕事をするのは初めてではなく、1997年から2年間横浜国立大学で勤務した経験があるので、国立大学の改革がどうあるべきかについてそれなりの夢を描いていた。私の夢は、京都大学を世界のトップ・クラスの大学にひけをとらない水準に引き上げる基盤を整備することであった。学生を教え、導き、育て、これまで碩学が営々と積み上げてきた学問を継承し、発展させるのは教員の仕事である。事務局長としての私の役割、責任は、そういう使命を担う教員が思う存分力を発揮できるよう、施設や設備などの物的インフラを整備し、研究費を確保し、財務や人事制度を改善していくことである。

図書館は、いかなる大学にあっても大学の中心である。図書館を見れば、図書館で学ぶ学生や教員を見れば、図書館で働く職員の表情を見れば、その大学の教育研究の質はおおよそ分かる。

私は、ロンドン大学(LSE)の大学院で2年間勉強し、パリにある経済協力開発機構(OECD)で国際公務員として2年、さらに在仏日本大使館でユネスコ担当副常駐代表として3年間働いた。その後も本省国際学術課、研究機関課、国際企画課などでの仕事を通じて欧米の一流大学を訪問する機会に恵まれたし、京大に来てからも京大海外フォーラムに参加したり、自ら企画を立てて中国、米国、欧州の大学を見て回った。もちろん、国内の大学も国公立を問わず数多く見て回っている。どの大学にしる、大学を訪問するとまず図書館を見せていただくことをお願いし、案内していただ

いた。そういう経験から、図書館を見れば大学の質が分かると考えるようになったのである。

一流大学の図書館では、責任者が図書館の役割と未来像を自信を持って説明する。私が会った図書館の専門職員は専門性が高く、たいていPh.DかMAなどの学位をもち、聞いてみると大学で図書館学や書誌学などの講義を受け持っているという。電子検索や電子ジャーナルの導入が計画性を持って進められている。AVメディアが豊富である。ゆったりとした書籍収納家具、格調高い読書机、革張りの椅子、抑えの効いた照明、落ち着きを与える絵画などじっくりと学問に集中できる環境が整っている。篤志家からそっくり図書館を寄付してもらったケースも少なくないようだ。

京大ではどうであろうか。未来まで含めて図書館の役割についての全学的な共通理解は必ずしも明確ではないようだし、その故か図書館に対する資源投入計画も策定されていない。個々の例外はあるにしても、図書館職員の専門性は概して教員が期待するような水準には達しておらず、欧米に見られるような教員が大学図書館職員に払う敬意や信頼感は感じられない。

図書館機構が発足したが、私はこの機構の役割は、京大全体としての図書館ビジョンの確立、それに従った整備計画・資源投入計画の策定、全学に対する説明、この3点にあると思う。他にも機能はあると思うが、それらは枝葉に過ぎない。機構長には強い指導力を発揮していただき、偏狭な部局中心主義を打ち破って世界トップ・クラスの京大を支えるにふさわしい図書館システムの構築に全力を挙げていただくよう期待したいし、図書館職員はもちろん部局長にも強力な支援をお願いしたいと思う。

(ほんま まさお)